

田池留吉氏との出会いがすべてでした

一九九三年四月から二〇〇五年六月まで、約十二年余り私自身セミナー参加という形で、皆さんとともに学んでまいりました。そして、学び始めてからずっと、自分の中のテーマは「愛」と「死」であることだと思い続けてきました。それでは、チャネラー、チャネリング、過去世を、心はとらえなかつたかと言うと、決してそうではなく、私もチャネラーになりたい、過去世を知りたいという欲の思いはありました。しかし、それらはみんな一過性のものでした。私の思いはもっと深いところにあることを、セミナーに参加するたびに感じていました。その思いは、学び始めてまもなくして、チャネリングと言われるものに飽き足りなくなっている自分を感じることで、段々に明らかになっていくようでした。

また、綴^{つづ}ってきましたように、私自身、大きな現象があるまでは、ずっと肉の力を信じてきましたので、学びに集っても、なかなか肉の固い殻を破ることができずに、心が鈍感な状態が続いていました。しかし、自分の中から出てくるものを信じたい、自分の中で感じることをできたものだけを信じていこう、それは最初から自分の中ではつきりしていました。だから、私はひたすらに、自分の使ってきた思いを振り返っていったのだと思います。ある人にくそつたれが出れば、それはその人だけにではなく、ありとあらゆる人と出来事に使っていたのは納得でした。まさに、相手変われども主^{めし}変わららず、でした。自分の心、自分の思いが変わらなければ、いくら首を挿^すげ替えても状況を変えても同じだ、それが意識の世界だと学ばせてもらいました。

私は、自分自身のテーマ、「愛」と「死」、このテーマをこれから先も自分の中で見続けていくことでしょう。

「愛」と「死」が分からなくて、さまよい続けてきた自分でした。その過去からの自分を清算することが、自分に対する愛でした。そしてその愛は人間

の究極的な場面、「死」をどのように自分で受け止めていけばいいのかを、自分自身に伝えてくれるものでした。そのために用意してきたこれまでの肉の時間と空間でした。愚かな肉は、愚かな肉の一生を性懲りもなく続けてきました。生まれて死んで、そしてまた生まれて死んでという繰り返しの途中で、ただ苦しみだけを積み重ねてきた転生でした。私はもうそろそろ、そのことにピリオドを打とうと、今世このように母に生んでもらって、自分の人生のシナリオを書いてきたと感じています。だから、私には今世のこの時間は大変大切な時間なのです。必死で、それこそ自分が生きるか死ぬかの選択の中で、私は自分に今の肉体を持たせたと感じています。その思いの強さゆえに、私は世間の常識からする幸せとか喜びとかの感覚のズレを、自分の中で根深くそして根強く感じてきました。世間で言う幸せ、喜びを感じても、どこかでそれを否定する思いが出てくるのです。幸せだ、嬉しいと喜んでいても、自分とそうではないでしょうと伝えてくる自分を感じ、これはどういうことだろうかと、ずっと自分の中で疑問でした。

もちろん、真実に行き着くまでは、肉の喜びと幸せを希う思いは強かったです。どうすれば、そしてどうなれば、自分は心の底から幸せだ、喜びだと感じられるのかと思ってきましたし、肉の努力もしてきましたつもりです。しかし、どう頑張っても、自分が納得いく回答は得られなかったというのが、本当のところでした。何かが自分にはない、何かを欠かしていることは感じて、ずっとその何かが分からなかったのです。

そういうことを感じてきた私には、いくら自分自身が肉にまみれた生活を送っていても、決して自分を誤魔化すことはできませんでした。それを私は、これまで語ってきましたように、疼きと理解してきました。自分の中で疼く思いがあって、何かのきっかけがあると、その疼きはより強く自分に響いてきました。それが、自分の背中を押し出し、具体的な形となって目の前に現象化して、自分に気付きを促していったと解釈しています。自分の心が敏感になり、本当のことをとらえ始めるようになれば、そういったことに納得していきました。疼きは、自分が自分に伝えている、自分が自分に教えている

ものだ、そう感じてきました。そして、では自分に伝え教えている自分とは何なのだろうか、また、それを聞いている自分とは何なのだろうか、ということをよく思っていました。私は、そうやって第三者的に自分を眺めることをしてきました。学びに集ってからも、心を見るところという作業は、この第三者的な見方で自分を眺める、一歩引いて自分を見つめることが肝要なのではないかと、私自身思っています。物事の渦中になれば、全体像を見ることができません。そういったことが、心を見るところにも当てはまるのではないかとというのが私自身の思いです。そして、また、肉というものは一様にして愚かであり、それを前提にして心を見る作業をしていくことも大切だと思っています。そうすれば、世に言うところの人格者は存在しないことが分かります。もつと言えば、アルバートという波動を知らなければ、肉の世界では人格者で通用していても、意識の世界では決してそういうことではない、このことが歴然としてきます。

そういった肉的なものをみんな外^{はず}して心を見ていけば、人としてそして道義上、よしとして受け止め流していることであっても、その作業を進めていくほどに、全く違う方向から心を感じてくるものがあると思います。すなわち、物事を形としてとらえていくのではなく、波動として感じていくようになるからです。肉の世界ではよしとしてきたものも、果たしてそこから来る波動、エネルギーはどうだろうかとなってきます。そういうものを感じながら、日常生活を続けていけば、自分の毎日はこれでいいのだろうか、朝起きて夜寝るまでの一日がこうして過ぎていくけれど、本当にこれでいいのだろうか、必ず自分に問うてくる時がやってくるのです。中からの疼^{うず}きが肉の表面近くで疼いてくるとも言えばよろしいのでしょうか。もちろん、そういう時に、他人^{ひと}に自分の思い悩んでいることを話したりして、何か回答を得ようとする、解決策を見出そうとすることも、ひとつの手段でしょう。独りで思い悩むよりも、心の中にある思いをみんな吐き出していくことによって、道が開けていくかもしれません。しかし、私はやはりそういう時だからこそ、よりいっそう真剣になって、自分自身に訊^{たず}ねていかれることをお勧めしたいと思って